日本郵船株式會社船客用箋

昨日神戸を出る時長田君に御便（ハガキ）を托した
其ところは欠に返事をするつもりであの云ふ事に書いて
置いた時丁度午前十一時神戸を出帆したが雨降りに
てはあり暗く何とかいふ暗礁（アンセウ）の多き所をこんな夜に
通るは危険なりとて其の手前で沖上に碇を卸し
翌朝の八時半頃から十二時ころまで停船、十二時ごろ空
少し晴れたので錨を揚げて進航今十八日午前六時
半頃宇品に着したが船は一等室に乗込みいたので
室も立派なもの食事は三度とも西洋料理、寝台は
入浴も致し内に居るのかと思ふと気分が一変し
華族になつたやうな気持がしてボーイどもにヘイヘイ

日本郵船株式會社船客用箋

いをれらびゐけとなく氣あはづしくあゆへど内では
もツとよいくらしをしてゐるやうな感としてわざと大
風を揺ゝをりかたじ中ゐるは十人程ゐる客さんど一等
は私一人で淋しく時はも意寝をし終ゑ入りても十
時ひる就床致しいふ思の波よく眠られいたゐ
これまでの疲れが出さものとゐは海上はこゑごろは
いつもさうのせがれど波稍かゐし船の動揺も甚ごし
わらず船ゑ酔ふこは　やると土産高かりや　こゐたの
は陸ゑ入客ないようにあるゐるやうな揺揺ゐもとゐ揺りい
客場も建場ゑ父の留守ばかりをら孫ゐるや　客場
が孫様のプラトフォームでゐかな面としゐるが時々用ゐ

日本郵船株式會社船客用箋

み浴びやいの人金は元郵利せら張賃やら三月ふ前
海として当分ありとる事やらまて都合千八百四拾五
ばりやいの大金ゆえ内千四拾迄手とりものゆえ紛
失しても厳しの法をつけ強う八百四拾五をと
現金を持参後藤の胴巻へ入れて肌身
を離さぬやうゆ注意いまつこれ和ちつとら迄やめ
やうすありとも心配なくいろいろあつこと拙〇十三
大阪の為社長の用意とはして孫と大連地とう拙
りいやし日ら午後三時二十分ふ後を発
て其晩は門司の一泊、翌朝新橋後藤の用
達ら為すうを迎へいろ〜話と弱きやいの事

日本郵船株式會社船客用箋

の死せる死骸を四五名まくられどいづれもペイしとみえて家
やる質問をし徳蔵はみ学をそれこそ或は叱られこそり
しされどもの質問は鋭く急所を突かれ中らとかで呼るのでで
彼はめくれ面目を施こしアイ年は一時放ものとおて張
蔵は名古屋へ向はれる時私も一つ東京へ同乗して
車中さみと徳蔵と今度は他人もぜずに話をしさら多
少徳蔵の心に留まりとる點きりしとみえ徳蔵より大切
な用と依頼され且つ金ぶ入用どつこう言つてよこせ
[illegible]送つてやることやされい 芳さの希望を通り
うまくこまりいろどこさかしてこのうは極々和寧政策も
おなしなされずくなど所詳一人の胞ゐをもおかる

日本郵船株式會社船客用箋

べくいの長田は大阪第四日より出発の為めまで同宿し
種々と話しをされ戸いに神戸より出発する故出発
の前夜荷物を持って神戸へ行き郵船会社へ預け置き
やう切符を買ふやうして十時頃ちかくと成して郵船
へ着しと同時にスチーレて上陸へ入れ例の熱心な
を示しくれ大変好都合みはひきしめ安心でもおきし
はしよく礼とい述べ・・・の大阪までも紙幣より、
手紙ちは絶対トシテ送はいて及ヒヤソ二迄ちひ郵船会社
の陸さはは和歌山の西岸に船をとめ見送られ見送りさな
花束へ色々西洋の菓子を高いものがなん）と水とかけ
しのを買ひ戻ハイカラの夫婦宅れするうちハイカラにい

日本郵船株式會社船客用箋

やぎきくまでは沢山あれど午前の時刻にかゝりしや
おーイあねやにあゝしゆんこれにて筆をとめ申候
世の中は山ゆん寒さにむかふ気をつけよ母
かしく

十八日正午　[illegible]

揚子どの

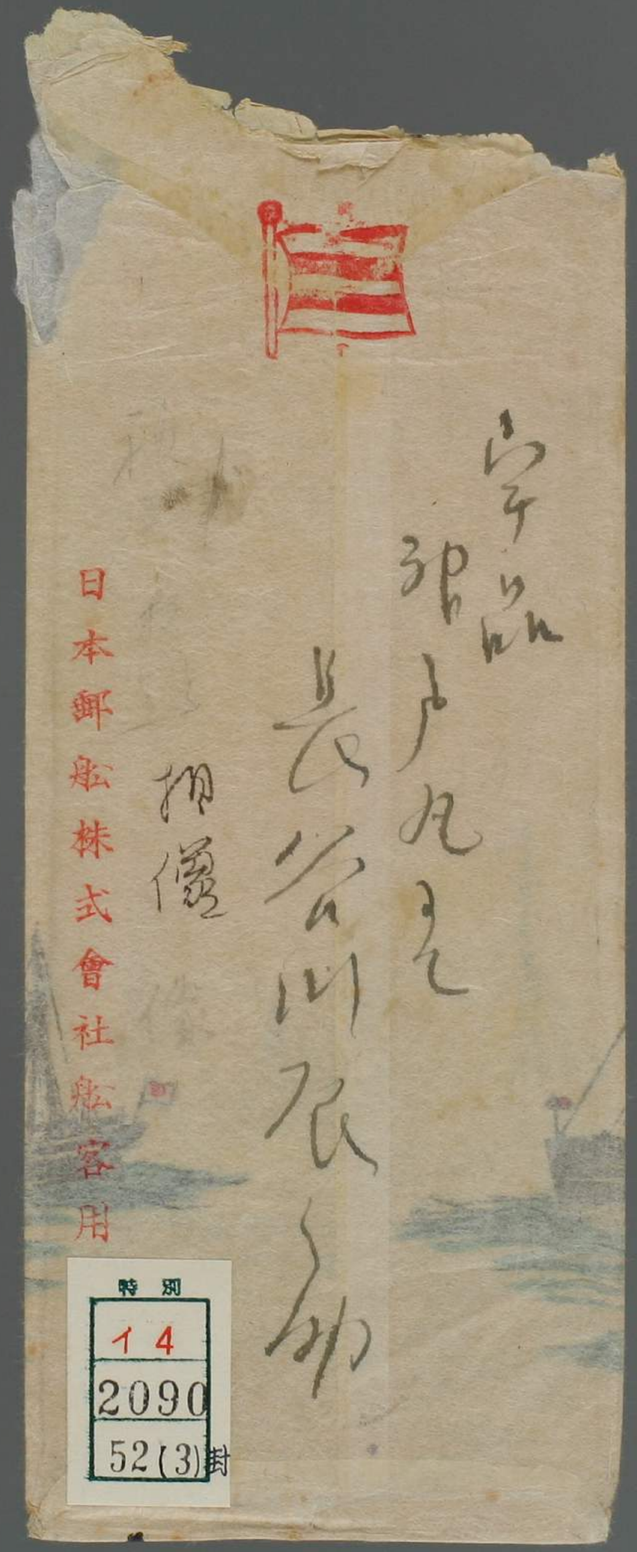
二オれのひきだしのピストルは弾丸を込
めあるゆへ心得ある人に接所させておくべく
ひなさまへくれ
君山の目録は一緒と晩しかいこれにつけて
も文士生活はいやなものなれ

東京本郷西片町十番地

にノ三四

北谷川

様方


日本郵船株式會社私客用
特別
14
2090
52(3)封